

【研究書翻訳】

F.ブラース著『アッティカの雄弁』（部分訳）

----- 第 2 部第 4 章 378-399 頁「アナクシメネス」 -----

野津 悌

凡例

- 一、 拙訳は Friedrich Blass (1843-1907) 著 *Die Attische Beredsamkeit* (1868-1880; 2nd ed., 1887-1898) 第 2 部第 4 章 Isokrates' Nebenbuhler (イソクラテスのライバルたち) を構成する、アンティステネス、アルキダマス、ポリュクラテス、ゾイロス、アナクシメネス、に関する一連の論考のうち、アリストテレス偽書『アレクサンドロスに贈る弁論術』の著者と目されるアナクシメネスに関する部分 (pp.378-399) の邦訳である。訳出に当たり、上掲書改訂第 2 版の復刻版 Blass, Fr.: *Die Attische Beredsamkeit*, Georg Olms Hildeshaem 1979, pp. 378-399 を使用した。
- 二、 Blass が付した原注の訳出は割愛し、本文を理解する上で不可欠な内容のみを訳文中 [] 内に示した訳者による補足説明および訳者注に反映させるにとどめた。なお訳文中にある () は原著者によるものである。
- 三、 弁論術の用語およびアナクシメネス弁論術において特別な意味を担う語句を訳出する際には、訳語を太字で示すと共にその語句に対応するギリシア語 (ないしラテン語) を添えた。またそれらの語句が『アレクサンドロスに贈る弁論術』中の語句である場合には原則として岩波書店『アリストテレス全集 16』1968 年 (岩波書店) 所収の斉藤・岩田訳における訳語を当てた。また拙訳本文および訳注において同書からの訳出引用を行う場合にも原則として両氏の邦訳を使用し、同書原典への参照は斉藤・岩田訳の底本である Rackham 版 (Loeb 所収) に依拠した。
- 四、 拙訳における (1) から (5) の見出しは、原書著者が各頁上部の欄外に記した内容見出しを訳出して本文中に挿入したものである。他方、「(3) 『弁論術』」中の < 第 1 部について > < 第 2 部について > < 第 3 部について > < 2 つの補遺について > < 弁論術と道徳の峻別 > < 学問的精神の欠落 > < 実践的教科書としての『弁論術』 > という小見出しは訳者が付したものである。

邦訳

(I) 生涯

ここで最後に取り上げるべき弁論家は、ランプサコス出身でアリクトクレスの子であるアナクシメネスである。彼はゾイロス及びキュニコス派のディオゲネスの弟子であり、それゆえ弁論術と同時に哲学の教育を受けている。文献資料によれば彼はアレクサンドロス大王の教師であり、その後大王の遠征に同行し、さらに大王の歴史を書いたとされる。このことからすると、紀元前 330 年頃、彼はいまだ壮年にあったことになる。他方で、現存する彼の弁論技術書〔つまり『アレクサンドロスに贈る弁論術』のこと〕は紀元前 340 年直後に執筆されたものと思われ、従って我々は彼の生涯を紀元前 380 年から 320 年と設定することにしたい。彼はまた、マケドニアのフィリッポスとアレクサンドロスのもとへ赴くまでの間、アテネにおいても教育を受けており、後にはその地で雄弁を教えた。アナクシメネスはまた、アレクサンドロスが小アジアへと遠征して来たとき、ランプサコスに身をおいていたようである。というのは、彼は、当時大王の怒りにふれて極めて酷い脅しを受けていた祖国を或る策略を用いて救い出したとされるからである。この策略についてはパウサニアスその他が報告している。それによると、アナクシメネスがランプサコスの人々の使者として大王を訪れた。そして彼の意図に気が付いた大王は即座に、自分はアナクシメネスの願いとは正反対のことは行うであらう、と厳粛な誓いを立てた。これに対してかの雄弁家は、ランプサコス市民達の妻子たちを売り払い、街を略奪し、神殿を焼き払うよう願った。かくして、アレクサンドロス大王は自らの誓いのゆえに容赦することを余儀なくされたというわけである。ランプサコスの人々はその後、この同国人のためにオリンピアに立像を建立した。パウサニアスはこの立像を見た。アナクシメネスの弟子として名が挙がっているのは、逃亡者追跡人 *phygadothêras* として悪名高いアルキアス、さらには、ホメロスが謡ったそれぞれの詩行の直後に自作の詩行を挿入した形での『イリアス』を出版したラリッサ乃至マケドニア出身の雄弁家ティモラオスである。アナクシメネスとキュニコス派のディオゲネスとの交際に関してはディオゲネス・ラエルティオスが幾つかの逸話を報告している。それによるとキュニコス派のディオゲネスはアナク

シメネスの肥満体にかこつけて彼を嘲笑したという。アナクシメネスが彼の贅肉の一部を、贅肉という点でも乞食同然に貧しいディオゲネスの為に、そしてアナクシメネス自身の為にも、分け与えてはくれまいかというのである。また別の時には、アナクシメネスが何か演説をしている最中、ディオゲネスは一切れの魚の塩漬けを用いて聴衆の注意をそらし、そして勝ち誇ったように「さあ見ろ、たった一オボロスの一切れの魚の塩漬けがアナクシメネスの演説を台無しにしてしまったぞ」と叫んだという。このようなことは友情や師弟関係を印象付けるものではないが、それでもなおそれらが『スーダ辞典』における前述の報告〔アナクシメネスがキュニコス派のディオゲネスの弟子であったという証言のこと〕を未だ反駁しうるに至ってはいない。機知に富んだキオスのテオクリトスはアナクシメネスがマントを羽織る垢抜けない様子を嘲笑し、また彼はある時、アナクシメネスが演説を始めた際「さあ言葉の奔流と意味の一滴の始まりだ」と言ったという。またアナクシメネスはテオポンボスとは犬猿の仲であり、パウサニアスの伝えるところによると、この男に極めつけの意地の悪い復讐をなした。アナクシメネスはテオポンボスの名を用い、彼の文体を正確に模倣した上で、アテネ、スパルタ、テバイ（つまり三巨頭）に対する誹謗文書を起草し、到るところに送りつけたのである。ここに双方の師匠たちの間における闘争〔つまりテオポンボスの師イソクラテスとアナクシメネスの師ゾイロスとが犬猿の仲であったということ〕の反映を認めることができる。

(2) 著作

アナクシメネスは当時ソフィストないし弁論家として非常に高い評判を得ていた。彼の大きな多才と多作とがそれに貢献したはずである。彼は、パウサニアスの言によれば、即興弁論の分野においても類稀な達人であった。彼はまた弁論代作にも携わった。例えば、地理学者のディオドロスとヘルミッポスは、エウティアスによるプリュネに対する告訴弁論をアナクシメネスに帰している。この告訴弁論はヒュペレイデースによる反対弁論を招いたものでもある。さらには、我々の手元に達している唯一の彼の著作である『弁論術』、そして幾つかの審議弁論がある。もともとこれらの審議弁論は、イソクラテスのそれと同様おそらくは偽作である。また演示的弁論としてはヘレネに対する賞賛弁論が挙げられる。もともとこれは、ゴルギアスによるそ

れと同様、賞賛よりは弁明を含むものであった。またゾイロスと同様にアナクシメネスもまたホメロスについての書物を書き、この詩人をキオス人として説明したのであるが、それ以外の傾向については知られていない。分量においても意義においても飛びぬけていたのは歴史著作である。いわゆる『第一の歴史著作』乃至『ギリシャ史』は、ゾイロスによる歴史著作と同じく、神々と人類の発生からはじまり、その 12 巻のうちに、マンティネイアの戦いに至るまでのギリシア人とバルバロイたちの全史を包括している。この次に 8 巻乃至それ以上からなる『フィリッポス王記』が続き、さらには、その第 2 巻の存在が言及により確認されている『アレクサンドロス記』が続く。また最後に、諸王たちの死に様について記述した『諸王の交替』なる書物のことを我々は聞いている。ストバイオスにみられる（嫉み、同情、貧乏、両親への愛、精神的ならびに身体的快についての）総じて倫理学的内容を持つ断片群は、そのうちの一片断がプラトン著『国家』の語句を逐次的に用いていることから、なんらかの哲学的著作に属するものと推定されるだろう。ディオゲネスの弟子である彼がそのようなものを書いたことはいかにもありそうなことである。事実彼は自らの哲学的教養を『弁論術』の中でも示している。アナクシメネスの名を掲げているアレクサンドロス大王叙事詩については、パウサニアスはこれを偽作であると説明している。もし偽作でないとすれば、師アナクシメネスのもとでティモラオスが詩作を試みたということもまたいくらか了解しやすいものとなったことだろう。

残念なことに、アナクシメネスの歴史家としての功績について我々が何らかの判断を下すためには、彼の歴史的著作のうち現存しているものが余にも少ない。全体的性格は、イソクラテス派であるテオポンポスやエポロスの性格と似たものであったと推定される。なおこの 3 人〔アナクシメネス、テオポンポス、エポロス〕それぞれの手になる、戦闘準備の完了した軍隊の前で将軍たちに行わせるという目的で念入りに作り上げられた演説を、プルタルコス「鉄の武器の近くにありながらそんな愚かな演説をする者などいない」という詩句を用いて揶揄している。文章家アナクシメネスに関する一般的評価もまた好意的なものではない。ディオニュシオス曰く、アナクシメネスは弁論の全分野において巨匠たらんとしたが、如何なる分野においてもそれを果たすことがなく、むしろ、総じて力なく訴えかけるところが少ない。

このことで想起させられるのは、言葉は洪水のようであるが意味と意義はしずくのだというテオクリトスの言葉である。またこの言葉は、アナクシメネスの桁外れの長広舌を批判するものであると同時に、ゾイロスを実践的弁論家という部門のうちに数え入れたディオニュシオスが、アナクシメネスをその部門のもとにではなく演示的弁論家の部門のもとに登場させているのは何故であるのかを十分に説明するものである。更に言えば、アナクシメネスの文筆家としての性格は、テオポンポスの性格と大きな親近性を有しており、アナクシメネスをこのテオポンポスやその他のイソクラテス派から切り離すことができない程である。

(3)『弁論術』

一方で我々は『弁論術』のうちにこの文筆家の精神と文体について自ら判定を加えるための十分な材料を有している。この著作が保持されたのは、それがかなり後になって --- もっとも西暦 5 世紀以前のことであるが --- アリストテレス著作集の列に加えられたという事情による。もっとも、ディオゲネス・ラエルティオスも彼以前の他の誰もこの著作をアリストテレス著作の下に登場させてはいない。クインティリアヌスとディオニュシオスはこの著作をいまだアナクシメネスの名のもとに想起している。アリストテレス全集に加えられる際には、この著作がそれと共にアレクサンドロスに送られたアレクサンドロス宛のアリストテレスの言葉であるとされる無骨に捏造された文書が著作の冒頭に置かれた。この著作の識別名である『アレクサンドロスに贈る弁論術』はこのことに由来する。しかし早くもデシデリウス・エラスムスは、この弁論術がアリストテレスとは無関係であることに気付いていた。のみならずペトルス・ウィクトリウスは、クインティリアヌスがある一節において、弁論の種類を 2 類と 7 種とするこの弁論術に特有の分類法をアナクシメネスの名前のもとに引用していることに基づいて、本当の執筆者を知っていた。近年においてはシュペングエルが、ロレンツ・レルシュのようにアリストテレスに固執する人々や、カンペやヴァレンティン・ローゼと共に後世の匿名の著作家を著者とみなす人々に対して、アナクシメネスの権利を繰り返して見事に弁護したことにより、我々はこの問題はもはや解決済みであるとみなすのが適当である。

< 第 1 部について >

古典期の弁論家のものとしては唯一の現存する弁論技術書として、それだけでも大きな重要性を有するこの教説体系の概要は手短に言えば次の通りである。「政治的」なつまり市民生活一般に属し狭義の学識に属すのではない弁論に関して、アナクシメネスは**議会における弁論** *démêgorikon* と**法廷における弁論** *dikanikon* を区別する。この分類とは独立した形で彼はさらに、**勧奨** *protreptikon* と**諫止** *apotreptikon*、**賞賛** *enkômiastikon* と**非難** *psektikon*、**告訴** *katêgorêtikon* と**弁明** *apologêtikon*、そして**吟味** *exetastikon* という 7 種を区別し、それぞれの種はそれ自体として単独であるいは他の種との関連のもとで成立するものとした。これら諸々の種は、群衆相手の演説、裁判、私的交際において用いられる [『アレクサンドロスに贈る弁論術』1 章 1421b7-17]。--- **勧奨**は、当該の事柄が、**正義にかない** *dikaia*、**合法的で** *nomima*、**有益で** *sympheronta*、**美しく** *kala*、**快感を誘い** *hêdea*、**容易である** *râdia* ことを証明し、それが叶わぬ場合には、**実行可能であり** *dynata*、**実行せざるをえない** *anankaia* ことを証明するものであり、**諫止**はその逆である。著者は、これらすべての概念を定義した後、それぞれの種の場合に、類似する事柄、相反する事柄、過去に決定された事柄を用いて素材を増やす方法を明らかにする [同 1 章 1421b18-23a14]。--- このような公共的忠告の対象は、**宗教的祭儀** *hiera*、**法律** *nomoi*、**政治組織** *politikê kataskeuê*、**他の諸国との軍事的・経済的な同盟** *symmakoi kai symbolaia*、**戦争** *polemoi*、**平和** *eirênê*、**財政** *poros chrêmatôn* の 7 つである。そしてこの各々の対象に関して、一般的使用のための考え方と原則が呈示される。例えば**宗教的祭儀**に関して、如何にして従来のやり方の維持、拡大、縮小を勧告することができるか、など [同 2 章]。--- 次に、**賞賛**と**非難**に関しては、**賞賛**の対象もまた、**正義にかない**、**合法的である**、等々の事柄である、というように一層簡潔に論じられる。一方でこの弁論家はこの箇所では**論点の増大** *auxêsis* と**縮小** *tapeinôsis* の方法を論じている [同 3 章]。--- これに**告訴**と**弁明**が続く。後者において弁舌者は、問題の行為を行っていないこと、或いは、その行為が**正義にかない**、**合法的で**、**ポリスにとって有益で**、**美しい**、ということ、或いは、その行為は意図せずして生じたものであり、容赦されるべきものであること、を示す [同 4 章]。--- また、**吟味**は為された

行為と弁論の内容が相互にあるいは一般的慣習と矛盾していることを示すのである [同 5 章]。

< 第 2 部について >

--- 第 2 部では引き続き、弁論の 7 種に共通に属するものが明らかにされる。第 1 に、正義にかなない、合法的である、等々の概念。第 2 に、増大と縮小。さらに、立証 *pistis*、予弁法 *prokatalêpsis*、要請 *aitēmata*、要約 *palilogia*、洗練された言論 *asteiologia*、長い言論 *mêkos logû*、適度な言論 *metriotês mêkûs*、短い言論 *brachylogia*、叙述の構成方法 *hermêneia*、等の諸々の事柄である [同 6 章]。最初の 2 つの部門に関しては既に取り上げた通りである。立証の手段は、その幾つかのものは、語られた言葉、諸々の行為、人間そのものに由来するものである。通則 *eikos*、事例 *paradeigma*、証拠 *tekmêria*、エンテュメーマ *enthymêmata*、格言 *gnômai*、しるし *sêmeion*、反駁 *elenchos* がそれである。また別の幾つかのものは、外側から付け加えるものである。弁舌者の意見 *doxa tû legontos*、証言 *martyriai*、拷問による証言 *basanoi*、誓言 *horkoi*、がそれである。この弁論家は通則を、その事例を聞き手自らが心のうちにありありと思い浮かべうるような事柄、と定義する。人間というものが、情念、習慣、儲けから目を離さないことから、彼は通則を 3 つに分類し、勧奨、諫止、並びに、告訴、弁明の際にこれらの事柄を見出すための手引きを与えている [同 7 章]。----- 事例には、一般的見解に应ずるものと反するものという 2 種類がある [同 8 章]。証拠とは、アナクシメネスにとっては、当該の行為とは相反するような現実の出来事、或いは、当該の弁論の内部における矛盾のことである [同 9 章]。エンテュメーマは、その他のあらゆる言論ないし行為との間の衝突をその射程とする。例えば、正義にかなったことやよき習慣との衝突、あるいは反対に、不正や悪しき習慣との衝突である [同 10 章]。格言⁽¹⁾には、一般的見解に適うものと反するものがある。人はこれらの格言を、ある事柄自体に着目することによって、或いは、その事柄を別の事柄よりも程度が甚だしいものであること乃至その事柄が別の事柄と似た事柄であることを描くことによって、手に入れる [同 11 章]。しるしは信念あるいはまた認識を引き起こすことができる [同 12 章]。また反駁（罪状立証）は、必然的な事柄、或いは、不可能な事柄に基づくものであるがゆえに、ただ認識のみを

引き起こす〔同 13 章〕。--- アナクシメネスは、これら全ての**立証**の手段に関してそれぞれの相違点に着目して再度取り上げた後〔同 14 章 1431a24-b9〕上述の「外側から付け加えられた」**立証手段**〔**弁舌者の意見**、**証言**、**拷問による証言**、**誓言**〕について、これらの手段に力を与えたり力を削いだりするための一般的論法を挙げつつ考察を加えている〔同 14 章 1431b10-19、15-17 章〕。--- さらに、**予弁法**は聞き手からの非難（既に生じている非難からの防御もここで一緒に取り上げられる）あるいは、論争相手が語ることが見込まれる事柄に関わる〔同 18 章〕。**要請**には正しいもの⁽²⁾と不正なものがある〔同 19 章〕。**要約**は、懐疑的考察或いは論点の枚挙という形で明白かつ説明調でなすことも可能であるし、質問形式ないし**皮肉** *eirôncia* を用いることによってなすことも可能である〔同 20-21 章〕。なおこの場合の**皮肉**を、アナクシメネスは、**省略** *paraleipsis* という修辞技法と一般的な意味で皮肉と呼ばれるものとの両方の意味⁽³⁾を含むものとして把握している。機智に富み**洗練された言論**については殆んど如何なる教説もなく、むしろ、**長い言論・短い言論**について多くの教えを見出しうる〔同 22 章〕。**叙述の構成方法**つまり語の接続方法については次の通りである。**単純語** *haplús*、**合成語** *synthetos*、**比喩語** *metapherôn* が区別される。さらに、母音で終わり母音で始まる形での諸語の結合、子音で終わり子音で始まる形での結合、子音と母音という形での結合が区別される。そしてさらに 4 種の**配列** *taxeis* の規則が区別される。第 1 に、類似の諸語を並べて**配列**するか或いは距離をおいて**配列**するかの何れかである。第 2 に、同一の表現を使用するか或いは別の表現に取り換えるかの何れかである。第 3 に、ひとつの事柄を一語で示すか複数の語で示すかの何れかである。第 4 に、正しい順序で伝えるか或いは順を崩すかの何れかである〔同 23 章〕。このような混乱した考察をアナクシメネスはこれ以上続けはしない。もっとも、これに続く議論もまた同じく曖昧なものであり、アリストテレスの表現を借りれば舌足らずなものである。そこではアナクシメネスは見事な**叙述の構成方法**を目指し〔第 1 の必要条件として〕**2 つの部分から構成される言説** *to eis dyo legein* を奨励し、極めて非論理的な分析を施してその 6 種を規定している〔同 24 章〕。またこのような**循環的文構成** *periodos* へと向かう教えと並んで〔第 2 の必要条件として〕**明瞭に語ること** *saphôs legein* が求められ、これのために以

下のことが役立つとされる。[第 1 に] あらゆる曖昧さ *amphibolon* を免れたそのものにふさわしい名 *oikeia onomata* の使用。さらに [第 2 に] 母音衝突 *hiatus* の回避。[第 3 に] 冠詞ないし代名詞一般の付加。例えば *hûtos ho anthrôpos tûton ton anthrôpon adikei* [同 1435b14 「この人がその人に対して不正行為をなした」の意] とすべきであり *ho anthrôpos ton anthrôpon* [「人が人に不正行為をなした」の意] とすべきではない。第 4 に、混乱した語順や自然な順序を踏み越えた語順を回避すること。第 5 に、*men* [「一方で」の意] の後は *de* [「他方で」の意] を用い、*kai* [「～も」の意] の後は *kai* という具合に、常に相關する接続詞を後続させることである。もっとも母音衝突は、それが完全に回避不能な場合や息継ぎが入るときには差し支えない [同 2 章]。また見事な叙述の構成方法のための第 3 の必要条件であるものが、対置法 *antitheton*、構造の類同 *parisôsis*、音の類同 *homoiôsis* [あるいは *paromoiôsis*] である。そしてこれらのうち第 1 のものにおいては、語と思考の両方が対置される場合⁽⁴⁾、語のみが対置される場合、思考のみが対置される場合、があるとされる [同 26-28 章]。

< 第 3 部について >

--- 第 3 部でアナクシメネスは 7 種の弁論の各々について、弁論全体の構成すなわち弁論の諸部分の配置構成 *taxeis* を取り扱う。

緒論 *prooimion* は、主題を述べ、注意を促し、語り手への好意を促す、という使命を持つ。彼は最初に勧奨的弁論を取り上げ、この種の弁論のために、語り手への好意を促すための方法を特に詳細に述べている。聞き手は好意を持っているか、悪意を持っているか、どちらでもないか、のいずれかである。悪意を持っている場合、その悪意は語り手自身に対するもの、事柄に対するもの、弁論に対するもの、のいずれかである。また、語り手自身に対するものである場合には、彼の過去ゆえであるか、彼の現在の状況ゆえである。例えば、延々と語るには若すぎる、あるいは、未だ登壇したことがなかったというには年を取りすぎている、というように。以上の個々の場合それぞれについて考察がなされる。そしてさらに緒論内部の配置構成に関して幾つかのことが述べられる [同 29 章]。**緒論**の次にくる陳述 *diêgêsis* は、使節による報告であれ、その他、過去の出来事の報告陳述であれ、現在の状況の説明であれ、未来についての予言であれ、明快で簡潔で説得力あるものでなけれ

ばならない。**陳述**はそれが短い場合には**結論**と共に一体化されるべきである。非常に長い場合は、分割し、**確証 bebaiôsis** をさしはさむべきである。程よい長さのとき、**陳述**はそれ自体として一体を構成する [同 30-31 章]。3 番目に来るのは**確証**である。これは**陳述**された事柄が信じるに値することの**確証**であることもあれば、その事柄が**正義にかなない、合法的である**、といったことの**確証**である場合もある [同 32 章]。4 番目に来るのが、論敵の議論に対する**予弁法**、5 番目に来るのが**要約**である [同 33 章]。あるいは、聞き手を援助へ促す弁論であるならば、友情、感謝、同情、等の感情惹起がこれに続く。さらに**諫止**の弁論のための方法が（それ自体として或いは**勸奨**の弁論との比較のもとで）一層手短かに考察される。そして最後に、憎しみ、怒り、悪意、等の感情惹起が対応する形で取り上げられる [同 34 章]。

賞賛的・非難的の弁論の場合にも**結論**は同様のものである。この場合には最初に血統を取り上げねばならない。この点に関する著者の考察はまたしても極めて詳細な点にまで及ぶ。次いで、**賞賛**される者の子供時代の如何、そして若者時代の如何を取り上げ、さらに成人後のその者の諸行為を、正義、知恵、勇氣という項目に分類しつつ、取り上げねばならない。また言葉を**格調高い堂々たるもの megaloprepes** とするために、各々の事柄を語るために多くの言葉を用いることが薦められる。**非難的**の弁論は**賞賛的**の弁論と相関的である。ただし**非難的**の弁論は嘲りへと墮落すべきではない [同 35 章]。--- **告訴的**の弁論に関しては、これまでと同様の**配置構成**によりつつ、**結言**における好意的気分の惹起法が特に周到に取り上げられる。そしてアナクシメネスはその後、**予弁法**（ここでは *ta pros tûs antidikûs* [同 1443a7「相手側の反論に対して準備された再反論」のこと]）の考察に一層長くとどまる [同 36 章 1441 b 30-43 b 23]。また**弁明的**の弁論に関しては、**立証**に対する反論、次いで**予弁法**に対する拒絶が取り上げられ、最後に、感情惹起を用いた**結語 epilogos** が一層詳細に考察される。また、**予弁法**の考察への補遺として、問答の方法に関して幾つかのことが教授されている [同 36 章 1443 b 23-1445 a29]。**吟味的**の弁論は、それ自体としては固有の弁論と言えるものではほとんどない。しかし著者はそのような弁論の構成に関しても手短に規定を与えている [同 37 章]。

< 2 つの補遺 >

--- 以上の記述に 2 つの短い補遺が続く。第 1 の補遺は、行動や人生においても弁論のために与えられたのと似た規則が看取されねばならないことを明らかにしている⁽⁵⁾ [同 38 章 1445 b 24-46a35]。第 2 の補遺は、政治的・倫理的な行動指針を含んでいる。しかしこの行動指針の大部分は、この弁論技術書から取り出されて並べられたものとは到底言えない [同 38 章 1446a 35-47 b 8]。この第 2 の補遺は一般に後世の編集と見なされる。しかしその場合、この弁論技術書に見出されない部分の出所の説明が当然求められる。この第 2 の補遺の終りは唐突であり、その始まりもまた同様に拙く接続されている。これに対して第 1 の補遺は、弁論技術を構成するその箇所までの理論構成 syntaxis に対する別の新たな理論構成の特徴を示しているようにも見え、繋がりも帰結も維持されている。しかしこれらの諸規則のひどいみすばらしさと内容空虚さ、並びに、これらの諸規則が弁論技術から導き出される際の極端な強引さが目に付くのみならず、用語法やその他の表現法の点においても、もとの弁論技術書との少なからぬ差異が現れている。従って、こちらの補遺もまたもとの弁論技術書の著者の手になるものではないと主張するのは容易である。しかし他方でこの補遺が存在する理由とその固有性に関して十分な説明を見出すのは容易ではない。実際、こう主張する人がいたとする。この弁論技術書がアリストテレスの名を受け入れた後、アリストテレスの立証の理論におけるような優れた評判がこの書に欠如していたという事実が、後世の何者かにこのような補足をなす動機を与えたのである、と。しかしこの説明はこの補遺の固有性に関して如何なる説明も与えはしない。のみならずその説明は、弁論技術書とこの補遺の成立時期の間にそれほど多くの数世紀を想定しうるほどにこの補遺の文体がアナクシメネスの文体から外れてはいない事実とも調和しない。

< 弁論術と道徳の峻別 >

これら 2 つの補遺をおそらくもともとはこの弁論技術書に属さないものとして脇におくとすると、この書の残りの部分において明白なのは、弁論術と道徳との間のきっぱりとした区別である。これに対してイソクラテスの場合には、弁論術と道徳が漠然とした哲学 philosophia のようなものの内に合流していた。従ってこのこと [弁論術と道徳をきっぱりと区別すること] は

また、訴訟技術の教師であることを公然と自認している点をイソクラテスから非難された初期の弁論技術家たちの流儀でもあった。弁護人が道德教師との間で必然的に陥らざるをえない葛藤に関してもまた、アナクシメネスは必ずしもイソクラテスの意に沿ってこれを解消するわけではない。彼は、陪審員に対する「不正な」要請でさえ状況次第では推奨している⁽⁶⁾。のみならず罰せられることなく証人を捏造する方法を自らそれを実行する目的のもとに教えている⁽⁷⁾。そして論敵たちが同様のことをなす場合には、彼らの「悪しき企み」を発見する方法を教えるのである。その一方で道德的・政治的事柄に関する主張は、そのあり方においても観察の精密さにおいても、通俗性の域を全く超えていない。ちょうどアナクシメネスの哲学的断片においてそうであるのと同様である。

< 学問的精神の欠落 >

--- ところで、一層重要なのは、この弁論技術書の学問的精神についての問い、並びに、アリストテレスの弁論術とこの弁論技術書との関係についての問いである。アナクシメネスの用いる事例はしばしばアテネの海事同盟、あるいは、ラケダイモン人やテバイ人との関係に言及しており⁽⁸⁾、フィリッポス王とアレクサンドロスには全く言及していない。言及される最後の出来事は、紀元前 343 年のティモレオンによるカルタゴ制圧である[同 1429b17-22]。以上のことからこの弁論技術書は、紀元前 340 年頃、つまりアリストテレスの弁論術より前に執筆されたものと思われる。アリストテレスの弁論術ではフィリッポス王とアテナイ人との間の最後の戦争についての言及がなされるからである。他方で、アリストテレスが彼以前の諸々の弁論技術書に対して行っている批判が、アナクシメネスの弁論技術書の場合には決定的に的外れとなる。アリストテレスの批判は、それらの弁論技術書は**エンテュメーマ**の発見法についても**勸奨**の弁論についても何ら教えることなく、二次的なことや**法廷における弁論**にばかり取り組んでいる、というものである。ところが事態はむしろ逆であり、アリストテレスとアナクシメネスは、その構想においても、考察法においても、幾重にも重なり合っている。アリストテレスもまた第 1 巻で**勸奨**の弁論、**賞賛**的弁論、**訴訟**弁論のための素材を次々と論じ、第 2 巻で、**エンテュメーマ**、**事例**という、弁論の 3 類に共通の方法を論じ、第 3 巻で、**叙述の構成方法**と弁論部分の**配置構成**を論じている。ア

ナクシメネスもまた、まさに哲学者のやり方で、**合法的なもの、美しいもの、有益なもの**、等々、現実的で一般的な概念を定義し、相互に対比することに努力しており、その定義においては時に哲学的厳密さに骨を折っている。しかしこれら全てのことに基づいて、アリストテレスのアナクシメネスへの影響を想定したり、この弁論技術書の執筆時期をより遅い時期に設定したりすることが必要であるわけでは決していない。実際アナクシメネスもまた哲学に触れていなかったわけではない。彼もまた哲学によってアリストテレスの弁論術と類似した方法論的構想へと近づいたのである。そしてアリストテレスが、ごく最近世に出たばかりの或いは未だ全く公表されていなかったこの別人の弁論技術書を、先行理論を批判する際に無視した可能性も大である。つまり、類似する諸点は表面的なものであり、我々が深く沈潜すればするほど、一層多くの相違点が明るみに出るのである。実際、アナクシメネスは、**陳述**は短くなければならないこと、また**予弁法**を弁論の特別な構成部分として立てていることなど、アリストテレスの主張に反する多くのことを教えている。のみならず彼にはとりわけあらゆる意味での学問的精神が欠如している。我々は、彼なりの仕方では哲学的教育を受けた経験主義者の言葉を聞くだけである。弁論術とは何か、それは他の諸学問とどう関係するのか、といった問題が彼を悩ませることもなく、何故弁論には 2 類と 7 種があるのか、あるいは類は種とどう関係するのか、という点に釈明を与える努力もしない。これらの概念と分類を彼はただ所与のものとして立てるのみである。あるいは彼の与えた諸定義を受け取るがよい。アリストテレスが**快感を誘うもの**を定義するにあたり**快樂**の哲学的な定義から出発するのに対して、アナクシメネスは**快感を誘うもの**とは喜び (chara) を引き起こすもの [同 1422a 18-19] と簡単に述べるのみである。なお一層不十分なことには**通則**、**エンテュメーマ**、等々といった重要概念の定義が抜け落ちている。また**叙述の構成方法**の理論の箇所では、アナクシメネスは、論理的思考から完全に見捨てられているのである。また以上の事柄に加えて個々の部分における多くの誤ちと歪みがある。実際、彼は**格言**の実例として、よりによって「私の敵たちは専制君主たちと同様の行動をしている」 [同 1430b23-24] というものをあげている。また彼は、**勸奨的弁論**の 7 つの対象を列挙する際には**戦争と平和**を 2 つのものと数えているが [同 1423a25-26] 後にそれらを考察する際に

はそれらをひとつのものとして扱わざるをえなくなっている〔同 1425a9〕。彼の教養が到達し得たのは、彼が弁論術の全体を鳥瞰的に分類整理し、その構成を固持しえた所までである。勿論これだけでも、我々が彼以前の弁論技術者たちに認め得たものよりはるかに多くのことではある。しかし彼の流儀は、アリストテレスの流儀に対して、いまだなお陰しい対立のうちに立っている。

< 実践的教科書としての『弁論術』 >

さてしかしアリストテレスの弁論術は実践的使用にはあまり向いておらず、我々が知る限り一人の弁論家さえも育て上げはしなかった。これに対してアナクシメネスの著作は、実践的教科書としては、抗いえない価値を有している。余りに多くを失ってしまった我々にとってはなおさらである。実際、ある先駆的研究者〔シュペングルのこと〕の言によれば、万事に関して勝利への手助けを与えることを目的としてソフィスト術をそれ以上に巧みに教えてくれるギリシア語の書物を我々は知らない。ローマ文学の分野において我々は『ヘレンニウス宛の弁論術』を有している。その真作者の名前を一層有名な別人と取り替えてしまった点で、この本もまた同様の境遇に置かれている。この弁論技術書の中では、その時代に至るまでの大いなる弁論術の進展に応じて万事がはるかに内容豊かかつ正確に講じられている。この弁論技術書の諸規則をキクロをもとにして裏付けうのと同様、アナクシメネスの弁論技術書の諸規則もまたギリシアの諸弁論家をもとにして容易に裏付けうる。アナクシメネスは無用なことは述べず、しばしば豊にそして十分に詳細に論じている。例えば、彼が**宗教的祭儀**について述べる箇所、そして特に、彼が弁論全体の構成について考察しているこの書の最後の部分である。この最後の部分は明らかにこの著作全体の白眉である。一方で、極端に欠乏しているのは文体についての教説である。というのは、彼はその方面での先行研究を自由に使用できる状態にはなかったし、彼自身そのような困難な研究対象に深く沈潜することあまり向いていなかったからである。我々は、**母音衝突**と**破格構文 anacolûthon**の回避などイソクラテスの弁論技術から移入された幾つかの要素をここでもまた見出す。しかし、**韻律 rhythmos**についての言及、**比喩 metaphora**についての考察等、その他の要素を見出しえない。それゆえアナクシメネスは文体の理論家としても美文家としてもイソクラテ

スに遅れを取っていると言わざるを得ない。なおイソクラテスが知っていたとされる「循環的文構成 **periodos**」という言葉が現れないのはそれ程驚くにあたらない。その事柄自体は存在しているのである。少なくとも **2 つのコーロンからなる循環的文構成 **dikôlos periodos**** が二つの部分から構成される言説 **to eis dyo legein** [同 1435a4] という名称のもとに取り上げられているからである。なるほど我々はさらに後の箇所でも**コーロン **kôlon**** [同 1435b40] という言葉の使用を見出しはする。しかしこの表現はいずれにせよ、随所で使用されながらも決して定義されることなく導入されている **skêma** [例えば、同 1439a35 では「弁論の諸形式」の意] **epicheirêma** [例えば、同 1426b37 では「告発の仕方」の意] **progymnasma** [例えば、同 1436a24 では「訓練用の実例」の意] といった言葉と同様、改竄による挿入と推定すべきである。実際このテキスト全体はかなり悪い状態の中で我々に伝承されてきたのであり、その悪しき状態は最新の校訂版においても未だ完全に解消されてはいないように思われる。

また特別の注意を要するのは弁論の**類 **genê**** と**種 **eidê**** についてのアナクシメネスの教説である。というのは、**類**の項目においては欠けていた**演示的弁論 **epideiktikon**** が、**種**の項目において**賞賛 **enkômion**** と**非難 **psogos**** という形で後になってようやく現れているからである。要するに、これら**賞賛**と**非難**というのは、後に折に触れて彼が語っているように⁽⁹⁾、概して実践的目的のためではなく**演示 **epideixis**** のために適用されるものであるということなのである。著者はここでは哲学的な流儀は最小限に留め、類を抽象するものとなる一般的活動のうちに民会・法廷におけるそれぞれの弁論という二つの大きなジャンルのみを見出した。**賞賛**と**非難**は言ってみればソフィストたちの仕事であった。そしてアナクシメネスはソフィスト的弁論家の養成ではなく、実践的弁論家の養成を目指したのである。

諸規則に添える形で彼が与えた諸実例は、アリストテレスの流儀と異なり、むしろ『ヘレンニウス宛』の著者の流儀と同様に、いくつかの例外を除いて完全にアナクシメネス自身の手になるものである。その例外とは、彼が一度だけエウリピデスを引用したこと、時折イソクラテスの『アルキダモス』に、あるいはひょっとすると彼の『デモニコスに与う』に多かれ少なかれ逐次的に従っていることである。こうすることで、諸実例が一層正確に諸規則と結

びつくことにより、一層実践的であった。のみならず自ら弁論家であった著者にとってそれは一層自然なことでもあった。もっとも彼は、そのことにより、それ自体としては無味乾燥的である弁論技術書を、それに変化を加えることによって、一層面白くするための主要な方法を逃したのではあるけれど。

(4) 文章家としての性格

教科書としてのこの書物に関しては以上の通りである。ところでこの著作はそれ自体としても技術の産物である以上、アナクシメネスのその他の著作が欠けている状況の中で、著作家としての彼の業績の一般的評価のために活用されるべきである。しかもそのことは、我々がこの著作の中で諸規則とその実践的遵守とを同時に目の当たりにしていることによって、一層容易でもある。ディオニュシオスは、この著作に関して「力なくあまり訴えるところがない」という否定的判定を下すことによって彼の技術を明確に批判している。そしてそれは正当な判定である。そっけなさ、単調さ、並びに、**明瞭さ**・総覧性を過度に求めたことで生じた煩わしい広範さ、によってこの著作は眠気を催させる。彼はこの**明瞭さ**を**陳述**のためにも最も美しい文体のためにも推奨し、その手段として、**曖昧**でない表現、代名詞の付加、語と事柄の正しい順序、を挙げている。その一方で、不要な語や事柄を省くことによるこのような**簡潔さ**は**陳述**のためにだけ推奨される。弁論を拡大したり**演示**的に賞賛しようとする場合には個々の概念のために数多くの言葉を用いることが許されるのである。なるほどアナクシメネスは、この場合の対象がそれにふさわしくないゆえに、そのようなことは稀にしか行っていない。しかしその一方で彼が**簡潔さ**のために骨を折ることも同様に稀である。例えば「立法者がこの法律を立てたのは、この意図からである、と主張するのは私ばかりではない。かつて、リュシテイデスが私のいまの主張にごく近い説を提出した際、裁判官たちもまた、この法の解釈については、その説を採決したのである〔同 1422b20-21〕」あるいは「我々が単独でテバイ人を相手に戦うのは不利である、と思われるならば、先ずスパルタ人と同盟を結び、然る後に、テバイ人と戦うのが有益であろう〔同 1422b41-23a2〕」という言葉のように。またアナクシメネスが自らの弁論規則に従って各段落ごとに設定している**要約 pallilogia** 並びに**結論 horismos** はかなりの長さにわたるものであり、それらの中で彼は言葉を節約することすらしない。例えば「さて初めに明ら

かにしておいたように、このような論法によって、われわれは、無罪放免を求める相手側の弁論を反駁するであろう。要するに、立証、正当化、放免などを狙って論じて来ると予想される相手側の主張を、以上に述べた論法によって、我々は先取りするであろう〔同 1443b11-14〕」のように。つまりこの箇所では、初めに直前の段落の**結論**が呈示され、次いで**予弁法**について述べられたこと全体の**要約**がなされている。アナクシメネスは上の言葉とそれに続く予告とによって、**諸部分の結合 synaptein** ならびに弁論全体の「**織り上げ synphainein**」という技術上の目的を追求しているのである。これはイソクラテスが追求したものでもある。しかし勿論イソクラテスはこの目的のために一層技巧的かつ一層目につかない方法を心得ていた。アナクシメネスはその他にも、諸段落の結びを**エンテュメーマ**ないし**格言**によって印づけることを勧めているが〔同 1439a4-7〕これはおそらくこの弁論技術書においては実行すべきものではなかっただろう。--- アナクシメネスの語り口はあらゆる力強い表現を回避したことによって色あせたものとなる。ただ一度だけ「不信を治療する *tās apistiās iasometha* 〔同 1438b14〕」という目に付く比喻、稀な組み合わせ、を見出しうるのみである。そして結果として、純粋性は維持されても、それ以上の利点は排除されてしまった。**叙述の構成方法**は総じてイソクラテス的であり--- *tās apistiās* というイソクラテス好みの抽象名詞の複数形が現れている --- 同様に**転置 hyperbata** を回避した語順もまた同様にかの巨匠イソクラテスの性格に一致している。**母音衝突**に関しては、これをアナクシメネスは、一呼吸おく箇所並びに避けがたい場合においてのみ許容する。ところが、文節の内部においてすら、しかも如何なる必然性もないにもかかわらず、**母音衝突**が放置されている幾つかの箇所が散見され、**母音衝突**が一層よく回避されている他の諸段落とは対照的である。しかしこの点に関しては、荒廃したテキスト伝承を考慮に入れねばならない。文構成は緊密で、**周期的**である。とは言え、弁論技術書という素材は**演示**に特徴的な膨大な語の連結を構成するきっかけを与えはしなかった。またこの同じ理由から、アナクシメネスにとって見事な**叙述の構成方法**の本質的構成要素である、**構造の類同**、**対置法**、**末尾同音句 homoioteleuton** 等もそれ程に頻出せず目立ちもしない。その一方で、修辞技法への愛好のゆえに、彼が**簡潔**さを犠牲にしている場面もある。例えば「すなわちしるしのあるものは、

聴衆をただ考えさせるだけであるのに対して反駁はすべて判断する者に真理を教えるのである[同 1431b3-5]」のように。彼はまたある箇所でも 4 つの文節に**末尾同音句**を適用している。「神々に対しては敬虔 *osiôs*、費用の点では適度 *metriôs*、戦争のためには有益 *ôphelimôs*、鑑賞にとっては華麗 *lamprôs* であるように組織された祭典[同 1423b37-39]」というものである。それ以外の箇所では彼は概して「**2 つの部分からなる構成**」へと制約されている。生き生きとした表現のための修辞技法に関しては、他の**演示**にたずさわる弁論家たちと同様彼もまたそれを頻繁に用いることはなく、複数の名詞からなる小さな**接続詞省略** *asyndeton* が一度⁽¹⁰⁾、**首語句反復** *anaphora* が一度⁽¹¹⁾、*taxomen de pôs*; [同 1437b34「**配置構成**をいかにすべきであろうか？」の意] という極めて稀な比較的生き生きとした疑問文、が見出されるのみである。そしてそれゆえに、**配列**の側面から見ても、**演示**の華やかさ・弁論家としての生き様の欠乏という点においても、無力さと弱さという総合的な印象を受ける。ディオニュシオスの判定通りなのである。

アナクシメネスの他著作において以上の文体がどの程度に形をなしているのかについて多くは語るまい。『フィリッポス王記』中の唯一保存された一文と哲学的諸断片においては**母音衝突**は回避されている。それらにおける**叙述の構成方法**は特筆すべきものを提供しない。もっとも、哲学的諸断片における未だ完全とは言えない**周期的**文構成はイソクラテスの金言集におけるそれとの類似を示している。また以上のことと対照的に、古い時代の証人たちがアナクシメネスに帰している『プリュネに対する告訴弁論』中の一文は、その短い部分のうちに、**接続詞省略**、特異な表現（*eisegêtoría ekthesmos* [「無法なる女創始者」の意]）、独特な語順（*thiasûs andrôn ekthesmûs kai gynaikôn synagagûsan* [「彼女は無法な男女の群集を集めて」の意]）、さらには、ひとつのひどい**母音衝突**を提供している。現実の弁論家としてのアナクシメネスは全く別の人であったか、或いはこの弁論が彼に属するものではないかのどちらかである。

(5) イソクラテスのライバルたち

最後にアナクシメネスおよびその他のイソクラテスのライバルたちについての以上の考察から全体的結論を導き出すことは意味のあることである。紀元前 4 世紀が経過する中で、実際の弁論家や哲学者においては別としても、

イソクラテスの文体が至る所で絶対的支配を獲得し、最大の理論家アリストテレスもまたこれを承認したという事態を我々は見出した。ゴルギアスの後継者アルキダマスは師ゴルギアスよりむしろイソクラテスに似ている。アンティステネスの学校とポリュクラテスの学校はイソクラテスが敷いた路線の上に乗り入れる。かくして華麗な弁論や歴史記述などのための散文的文体における一般的規範が形成され、これら諸ジャンルの内部においては、個人による逸脱がそれ以前の時代と比べて目立たなくなる。その文体のための最も本質的な諸規則とは次のものである。叙述の構成方法においては詩的な飾り立ての抑制、語の配列においては母音衝突の回避、文の構成においては一層大きく一層規則に則った文節の構築、修辞技法においては、ゴルギアス的な要素の適度な使用のそして弁論家に特有の感情的な言葉の厳しい制限である。後者の要素は、文字で書かれて読まれるように定められた弁論のためには適切なものではなく、また弁論の滑らかな流れを阻害することにもなるからである。そしてこの文体はその後中断と修正を伴いつつも、本質的にはそれ以降の全てのギリシャ散文の文体として留まりつづけてきたのである。

訳注

- (1) 『アレクサンドロスに贈る弁論術』1430a40-30b1 で「あらゆる行為に関して、表明した自分自身の意見である」と定義される。
- (2) 同 1433b20-21 の「弁論の内容に注意を集中し、好意をもって聞くように」がその例。
- (3) 同 1434a21-24 の「われわれは恩知らずだと、かれらから非難をうけているが、再三にわたって彼らを助け、また、決して他の人々にも害を加えていないことは明らかである。もっとも、私の考えではこの点は、全く語る必要もないほどなのである」が前者の例。
- (4) 同 1435b29-31 の「この男が、私の財産を所有して富裕になり、私が、自分の財産を失ってこのように物乞いして歩くのは正しいことではない」がその例である。
- (5) 同 1445b33-4 に「なぜならば、生活態度こそ、他人の説得にも、よき評判のためにも、寄与するものであるからである」とある。
- (6) 同 1433b25-27 に「正しい要請と不正な要請とを知って、それらを適宜に用いる

F. ブラース著『アッティカの雄弁』（部分訳）（野津）

ため」、同 1433b27-28 に「相手方が裁判官たちに不正なことを要求した場合、その不正行為を見のがさないため」とある。

- (7) 同 1432a4 の「詐術を使って証言を得ることも可能である」という箇所を指す。
- (8) 同 1434a11 における、海事同盟に関する「賦課金 *syntaxis*」、同 1434a8 における「ラケダイモン人」、同 1429b12 における「テバイ人」など。
- (9) 同 1440b13-14 に「こうした種類の弁論においては、普通一般に、我々は、争うためではなく、見せつけるために、語るのである。」とある。
- (10) 同 1423b37-39 の「重装歩兵、騎兵、弓兵などが参加するので *sympompeuontôn hoplitôn hippeôn psilôn*」を指す。
- (11) 同 1433b19-21 の「*dikaion men ûn esti ... dikaion de kai*」を指す。